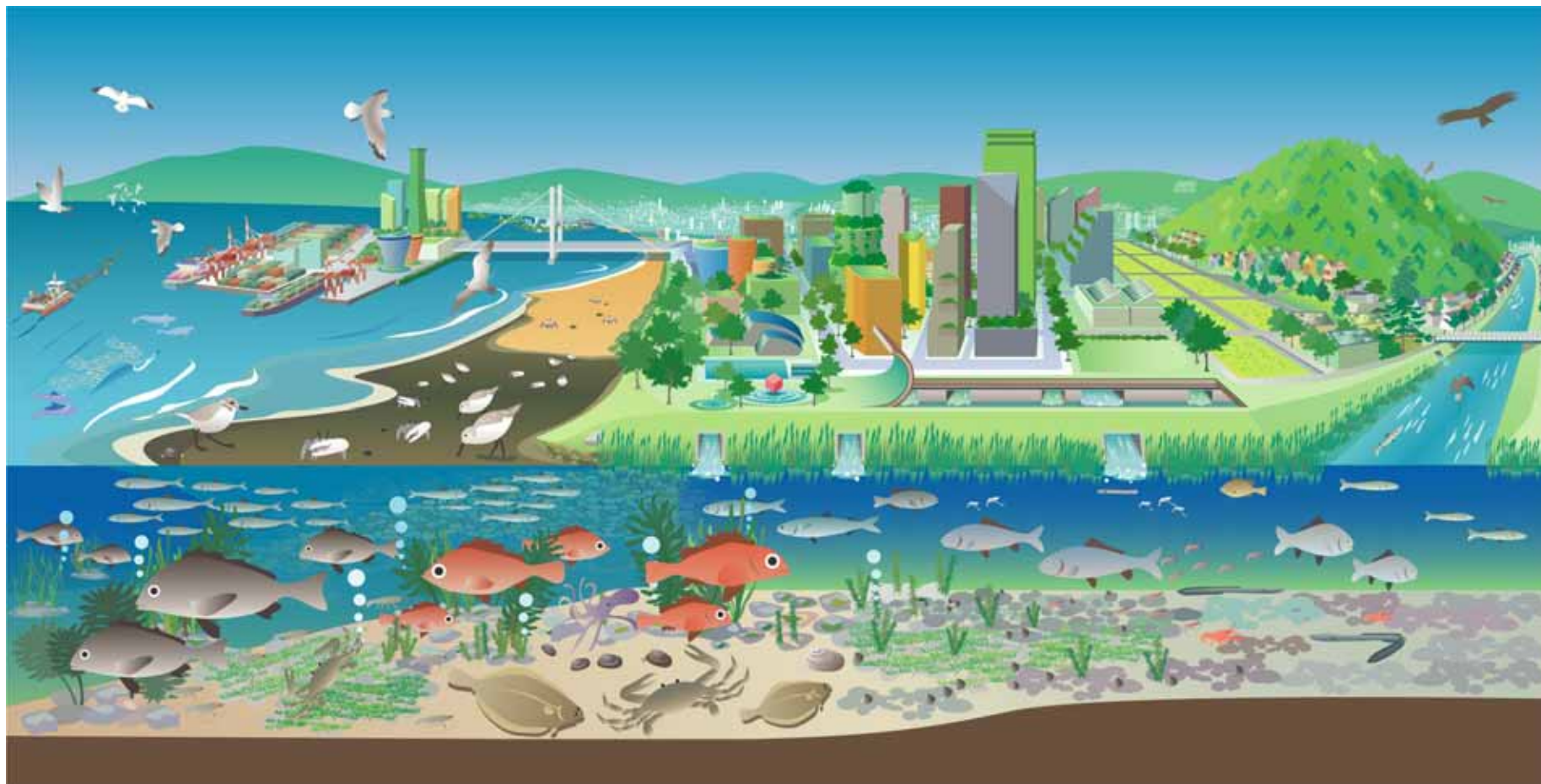


# 大阪湾再生行動計画の 実施状況について

資料1



平成17年3月30日 元気UP!関西  
大阪湾再生推進会議

【目 標】

# 大阪湾再生行動計画

森・川・海のネットワークを通じて、美しく親しみやすい豊かな「魚庭(なにわ)の海」を回復し、京阪神都市圏として市民が誇りうる「大阪湾」を創出する

【大阪湾再生に係る具体的な目標及び指標】

- ✓ **年間を通して底生生物が生息できる水質レベルを確保する**……………『底層DO(溶存酸素量)』5mg/L以上(当面は3mg/L以上)
- ✓ **海域生物の生息に重要な場を再生する**  
……………『干潟・藻場・浅場等の面積、砂浜・磯浜等の延長』
- ✓ **人々の親水活動に適した水質レベルを確保する**……………  
『表層COD』(快適な水質レベル)散策、展望:5mg/L以下、潮干狩り:3mg/L以下、海水浴:2mg/L以下、ダイビング:1mg/L以下
- ✓ **人々が快適に海に触れ合える場を再生する**  
……………『自然的な海岸線延長』
- ✓ **臨海部での人々の憩いの場を確保する**  
……………『臨海部における海に面した緑地の面積』
- ✓ **ごみのない美しい海岸線・海域を確保する**  
……………『浮遊ごみ、漂着ごみ、海底ごみ』

# 「大阪湾再生」の元気な取り組み

## 平成16年度の取り組み事例

1. 市民との協働の取り組み
2. 産官学連携の広域的・横断的な取り組み

# 1. 市民との協働の取り組み

ミニ人工干潟による生物生息空間形成調査  
～ 全国都市再生モデル調査～

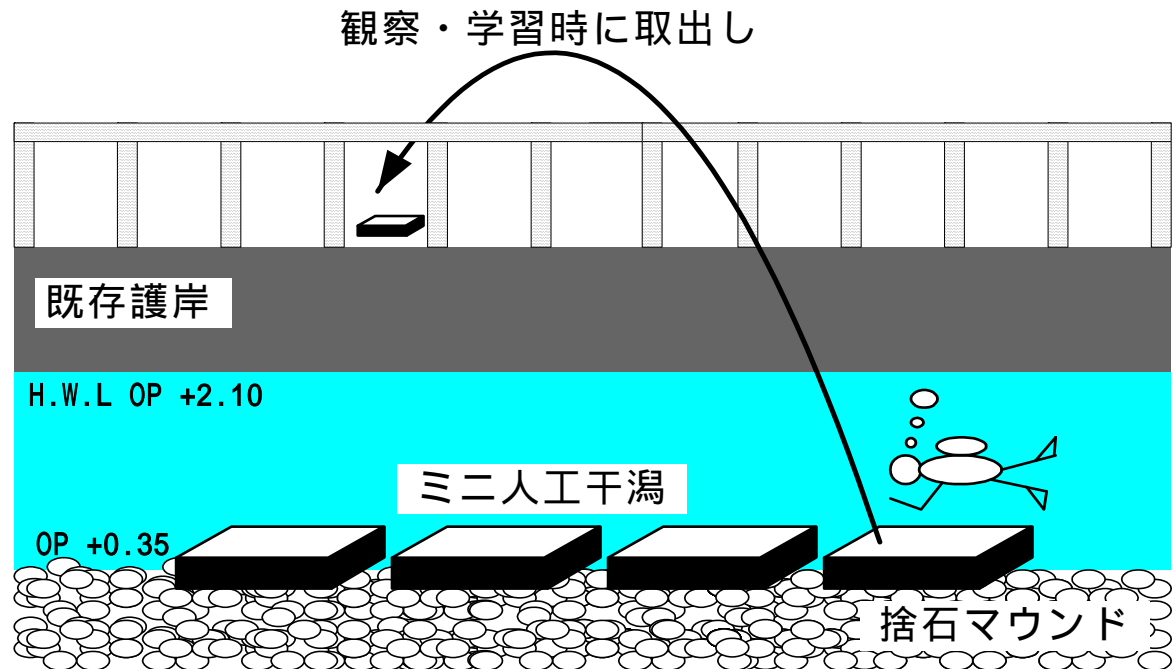
市民参加による「コンブの森づくり」社会実験

アマモ移植による「都市型ダイビングスポット」

# ミニ人工干潟による生物生息空間調査 ～ 全国都市再生モデル調査 ～

λ 可動式のミニ人工干潟を開発し、小学生・NPOの主体的な参加のもと、ミニ人工干潟における水生生物のモニタリング調査を実施することで、都市域に水生生物が生息できる環境の再生を目指すもの。

λ 大阪府堺市浜寺地区  
(堺泉北港)で実施  
(H16.10～H17.3)



# ミニ人工干潟の設置状況



雨の中、小学生とボランティアダイバーが設置作業



撮影：城者さん



撮影：城者さん

設置状況

調査主体：NPO大阪湾研究センター  
参加機関：NPO環境教育技術振興会  
(ボランティアダイバー)  
浜寺昭和小学校など

# ミニ人工干潟で確認された様々な生物



λ当初入れたアサリは7割が生きて成長

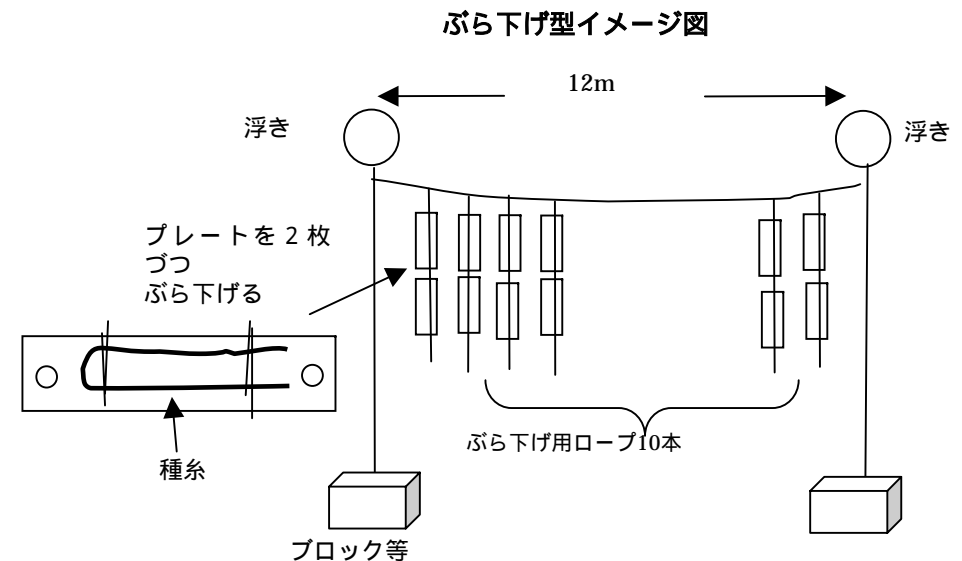
# 市民参加による「コンブの森づくり」社会実験

λ 都市臨海部の人工護岸周辺における水環境や生物環境の改善を図るとともに、大阪湾の水環境への関心を高めるため、コンブ海藻プレートにより市民と協働でコンブを育成するもの。

λ 大阪府堺市浜寺地区(堺泉北港)で実施中(H16.11~)。地元小学校、地元自治会が参加。コンブ協会も注目。

λ 当初、約200枚の貼り付け型プレートで行ったが自然条件などにより失敗

λ 再度、ぶら下げ型、貼り付け型、ブロック貼り付け型、ロープ挟み込み型など、約200枚のプレートで実験中





# 「コンブの森づくり」社会実験の状況



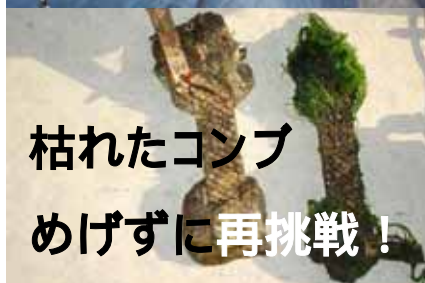
浜寺校区自治会も  
全面的に協力



浜寺小学校4年生、  
コンブが大きくなりますように！



今度こそ！



枯れたコンブ  
めげずに再挑戦！



S.Josha

現在、順調にコンブは成長中！

ロープ式

プレート式改良型

ここでもボランティアダイバーが大活躍！

## アマモ移植による「都市型ダイビングスポット」

λ 「海のゆりかご」と呼ばれ、水生生物の餌食、産卵、稚魚の育成の場として機能する「アマモ場」の育成により、魚介類が多く生息するダイビングスポットを実現するとともに、市民の自然再生の機運を醸成するもの。

λ 大阪府泉南市りんくうタウンのサザンビーチで実施中

(H16.12~)

λ アマモ種子シート敷設、アマモ移植の2つの方法で実施



# 大阪湾をダイビングスポットにしたい！ ～ 広がる取り組みの輪～

## √ボランティアダイバーの多彩な構成

λNPO環境教育技術振興会(CAN)

λNPO大阪湾研究センター

λ大阪コミュニケーションアート専門学校(OCA)

λ新聞報道やホームページを見て来られた方々

λマスコミ関係者など

## √様々な協力団体

λNPOアマモ種子バンク

λNPO大阪湾研究センター

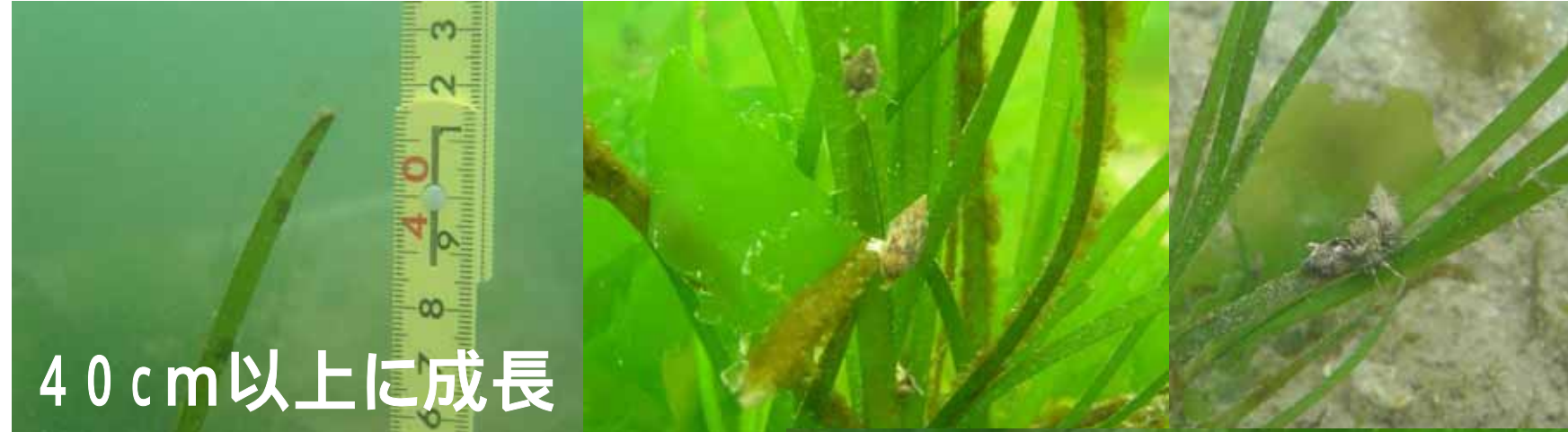
λ地元漁協など



アマモの植え付け

撮影:城者さん(OCA)

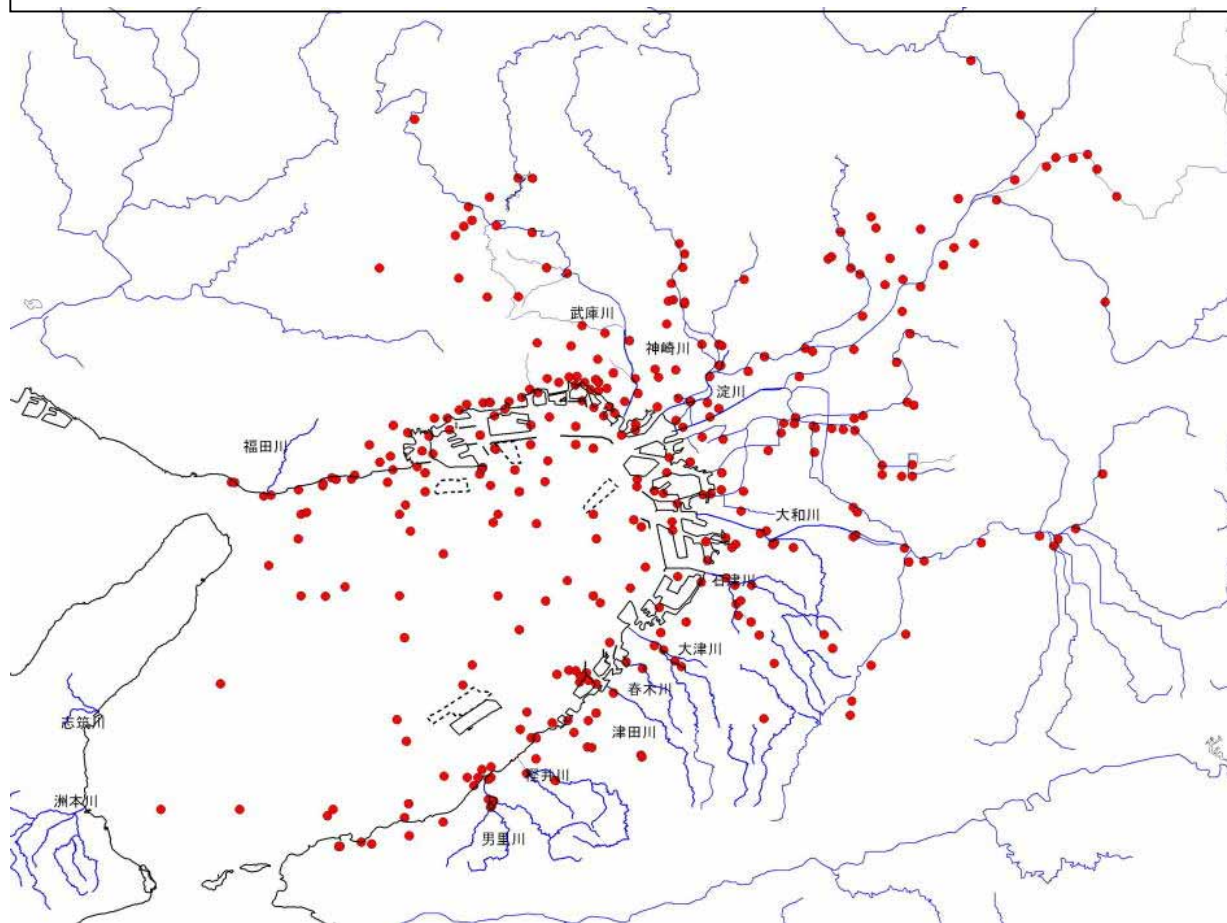
# アマモ移植後の状況



## 2. 産官学連携の広域的・横断的な取り組み

### λ 大阪湾再生水質一斉調査「海域160点、河川250点」

陸域(河川等)や海域の関係行政機関はもとより、土木学会の共同研究グループやNPO等と協働で産官学連携により実施。このような横断的、広域的かつ官民協働の取り組みは全国初。下水処理場データも活用。(8月2日を中心に、8月1日～26日に実施)



【水温・塩分計での測定】



【採水の様子】

# 大阪湾再生水質一斉調査の結果について

(H17.3.15記者発表)

大阪湾及びその集水域の水質を面的に詳細に把握、夏季において、以下のような特徴が明らかになった。

- v 海域の生物生息に重要な溶存酸素量(DO)は、内港部の護岸際などで生物生息に必要なレベルより低い
- v 海域の汚濁の代表的指標である化学的酸素要求量(COD)の値は、湾奥部の西側で大きい(台風での表層水移動や海域内の植物プランクトン増殖の影響あり)
- v 海域の富栄養化の指標となる全窒素(T-N)や全リン(T-P)の値は、湾奥部で大きく、陸域からの流入水質との関連が深い

# 今後も引き続き 大阪湾再生水質 一斉調査を実施

# 全部調べる大阪湾

## 産学官共同で水質一斉調査



大阪湾の復活に向け、府や大阪市、国土交通省などの関係機関が二日、一同に連携して実施した大阪湾の水質一斉調査。同じ時間帯に広範囲な調査を行ったことで、湾内の汚濁状況を把握する上で貴重なデータが集まった。関係者は「これほど大規模な調査は全国でも初めてではないか。これで大阪湾の生態がわかる」と期待している。

海域での調査は午前十一時関係者は船で湾内に入一時から開始。参加したり、生物が息息できるか(溶存酸素量)を測定する濃度計や水温塩分計を水中に下ろし、水深〇・五メートル間隔でデータを採取した。

### 大阪湾で実施された全国初の産学官連携による水質一斉調査

生しているかなど、大阪湾の環境構造の詳細が判明する。今後は継続して

いくことが課題。少なくとも年に一度は行う必要がある」と話している。

今回の調査では、海水中に酸素がほとんどなく魚介類が息できないエリア「貧酸素水塊」の分布状況など、大阪湾の水質の全体像が効果的にモニタリングできるものと期待されている。

調査に参加した土木学会研究グループの矢持進・大阪市立大大学院教授は「今回の調査は同時刻に、しかも広範囲に行われることに意義がある。貧酸素海域がどこから発

# 市民との協働の取り組みを中心とした マスコミ報道状況

行政と市民・NPOなどとの協働の取り組みが注目され、以下のとおり、テレビ・新聞とも継続的に取材を受けている。

## λ テレビ放映の状況

最近1年間の大阪湾再生に関するテレビ放映は、19本で合計約1時間(H16.2~H17.1)。

現在、全国放送の特集番組の取材が進行中。

## λ 新聞、雑誌等への掲載

産経新聞13件、朝日新聞10件、毎日新聞13件、読売新聞5件、日経新聞5件、日刊工業新聞3件、朝日小学生新聞3件、フジサンケイビジネスアイ1件、ヘラルド朝日(英字)1件、合計で54件。雑誌では、日経コンストラクションや瀬戸内海、地球環境など(H16.2~H17.3)。